

若い教師のために⑱

共感力

学力研常任委員 深沢 英雄

一、子どもは、傷つけながら近寄ってくる

「先生の足、どうして短いの？」

こんな質問に「そんな失礼なこと、いうんじゃない」と怒って見たところではじまりません。教師は、こうした言葉に傷ついて、「なにいつてんだ。おまえのほうがつつと短足のくせして。バーカ」と心の中で苛立っています。

対等の相手ではないのだから、こういう言いかたをしてはいけないということ教師は分かっています。でも腹は立ちます。冷静に考えると、

子どものこんな問いかけも、じつは教師と仲良くしたいからです。テレビなどの嘲笑文化に毒されているから、傷つけながらしか近寄ってこれられないのです。本当は、教師にかまってもらいたいのだから、「よし、どっちが短いか、比べようか」と、足を出

すというやり方もあります。「ショック。先生の心が傷ついた。」と演技することもあるでしょう。

高学年の女子になると、こんなことを聞きます。

「先生の顔、どうして気持ち悪いの？」

「お前の顔の方がずっと気持ち悪いのに」とやったのでは、いつべんに嫌われます。「気持ち悪いか。そうか。きみみたいな美人な女の子を教える先生の顔が気持ち悪くて悪いなあ。お金を貯めて、整形したいけどお金がないからな」

「えーっ。わたし、美人？」

「ああ、美人だよ」

「へっへえ。先生、整形しなくていいよ。その顔でがまんするからさ」

「美人」といわれたいから、「先生の顔、気持ち悪い」と近寄ってきたのです。軽く受

け流していくと、今度は、「先生」「先生」と傷つけない語法で話かけてくるようになります。

若い教師だと、最初からこんな芸当はできないかもしれません。要は、仲良くしたい信号だと受けとめることです。「死ね、死ね」「おばはん」「くさい」と言うような子もいます。えげつない質問にもたじろぎません。

その時には、先輩の対応を見聞きさせてもらいましょう。とても上手にいなしたり、入り込んだりしています。

ベテランの先生は、そういう質問を聞きながら、クラスの子ども達は、こういうことに興味をもちはじめたんだなと感じて、聞き出すようにします。子どもとの話から、学級活動や授業をつくる、そういう発想です。子どもとの対話です。

二、嫌いな子どもがくるどうしよう

クラスを持って、すぐに休み時間「先生、遊ぼ」とくる子がいます。なにかこの子は気が合うなという子です。ちよつと苦手だなと思う子もいます。でも、「教師」として平等に子どもに接していかないとはいけません。

ん。新卒の時、悩みました。

「教師にとって子どもたちは、好悪の対象でなく、教育の対象であって、好きな子ども、嫌いな子どもがあってはならない。教師は子どもにたいして平等であって、ひいきしてはならない。もし嫌いな子どもがいるとすれば、それは、職業的倫理に反すること、職業的良心に恥じること、教師としてあるまじき行為といわなくてはならない」という理屈は頭の中にあります。でも、頭と心が一致しませんでした。

そんな時に三上満「眠れぬ夜の教師のために」の中にこんな一節を見つけました。

「私はどの子に対しても自然な感情で好きになれるという教師はまずいないと思います。「えっ」と思いました。私だけなのか、そんな気持ちを持つているのは。私は、教師をしてはいけない人間なのか。教師に向いていないのではないかと考えていました。正直、ほっとしました。教師は口に出すのも、心の中で思うことも罪悪のように思っていました。

三上さんは、テレビで一世を風靡した「金八先生」のモデルと言われている先生でし

た。そんなすごい先生がこんなこと本に書いていいのかも思いました。

三上さんは続けて、「子どもたちは本質的にはかなりにくたらしいものです。素晴らしい側面をもっていると同時にいろいろないたらぬ側面やゆがみをいっぱいもって生きているのが子どもです。(大人も同じですが)生まれてから生きてきた数年間というのも、子どもとって真つすぐに育つ条件だけにとりかこまれてきた数年間ではけっしてなかつたはずです。子どもたちだつてそのなかで傷ついたり、いためつけられたり、ゆがませられたり、そういった体験をたくさん積んできます。」

では、なぜ、教師は特定の子どもの嫌ってはいけないのでしょうか。

- 1 教師の子どもにたいする好悪は差別であり、教育の機会均等に反するからです。
- 2 教師にとっては職業倫理に反する行為だからです。
- 3 教育的効果が期待できないからです。

教師が子どもを嫌うと、その子どもも教師を嫌うようになります。その逆の場合もあります。いずれにしろ、教師が子ども

を嫌うことは、子どもも教師を嫌っているという、お互いに嫌いあう関係をつくりだします。反映しあう存在だからです。

大人は、嫌いな相手ともいっしょに仕事はできますが、子どもの場合、嫌いなら教師の指導に従う気持ちにはなりません。

人を教え導くための基本は愛情。愛情なくして信頼関係は生まれません。人につきあうのに秘訣があるとすれば、それはまずこちらが相手を好きになつてしまうことではないでしょうか。相手の立場を想像する力。相手の欲することを与えるのが「愛」です。相手が何を欲しているかを考えて、相手の身になっていこうとすることです。好きになる手立てを講じ、子どもを愛そうと思ひ続けて、自分を一步一步変えていくことだと思ひます。

「若い教師のために」を長い間読んでいただきありがとうございます。この内容をベースにした書籍「新・教師力」(小学館)が今春発売されます。もし、よければ読んでいただければ有難いです。四月からは新たな連載を始めます。そちらの方もよろしくお願ひ致します。